

# かなえ

Vol. 21 春号

庸愛会 編集版

## 点を線に、線を面に。広げる地域連携。

富田町病院は在宅療養支援病院として、病気をかかえ医療や介護を必要とする患者さんがご自宅や施設など「生活の場」で安心して過ごしていただけるよう、さまざまな支援を行っています。

そのなかで大切にしていることは「地域連携」です。

私たち病院だけで支援は行えるものではなく、医療・介護・福祉や地域のさまざまな資源とつなぎ、支援の輪を広げることが私たちの役割だと考えます。

地域との連携をつくるためには法人内における多職種の連携が不可欠です。

それぞれの「強み」を活かしながら、「生活の場」とのつながりを「点から線へ、線から面へ」広げていくための法人内外での「連携」の取り組みを、2号にわたって紹介したいと思います。

富田町病院 地域連携室長 寺田 貴一

医療法人 庸愛会・社会福祉法人 健康会 広報誌「かなえ」 Vol.21 (春号)

2026年5月15日発行 / 発行者：庸愛会・健康会広報委員会 〒569-0814 高槻市富田町6丁目10-1 TEL.072-696-7754 FAX.072-696-2624



## 富田町病院 院内探訪 おじやまします!!



Vol. 02

今回は、総務課のお仕事を聞いてきました。

庸愛会と健康会の職員約250人の給与や様々な労務手続き、業者への支払いや現金の精算などの経理業務を3人でやっています。給与計算では、職員の勤務時間はタイムレコーダーで記録されますが、休日などは一つひとつチェックする必要があり、完了するのに総掛かりで3~4日かかるそうです。省力化を求めて徐々にIT化も進めており、昨年末の年末調整では各自で Web 上で入力してもらうようになりました。IT化も定着すれば省力になるのですが、その導入にはかなりの時間とエネルギーを費やします。また、補助金や処遇改善手当、最近では物価高に対する支援金など、さまざまな施策による手当の計算や手続きなどもあり、膨大な作業で、時期が重なるとたいへんだそうです。



労務関係の業務でも、入退職や傷病・出産・育児・介護などの休業等の諸手続きのほか、保育所入所のための就労証明など、様々な業務があります。給与に関わる手当や休業などは、原則本人からの申請によるのですが、総務課からいろいろアドバイスもしてくれます。その他、職員が働きやすいよう、職場環境改善や労働相談の窓口も担当しています。



紙面の関係で、総務のお仕事の列挙になってしまいました…。文字通り「縁の下の力持ち」として病院運営を支えてくれている総務のみなさんに、改めて感謝です。

(編集委員 平田)

総務課の部屋の窓辺には、いつも可愛い鉢植えが並んでいます。通所リハビリでの生け花のプログラムのお花を納入してくれているお花屋さん(かつてデイクアだった時代からずっと)が、持って来てくださるそうです。

### 富田町病院の取り組み



#### 健康講座

3月23日(月)、富田町病院の外来待合で第9回健康講座を開催しました。今回のテーマは「転倒予防」。

定員を超える54人のご参加をいただき、このテーマの関心の高さを感じました。転倒に関係する身体の構造から、日常における注意点などのお話で、会場からは質問のほか“普段こんなことに注意している”といったご提案もいただきました。途中軽い体操もして1時間。

今回の講座の内容は、「かわら版」第60号に掲載しています。富田町病院の玄関のラックに置いてあります。オレンジ色のA4のもので。

これからも地域のみなさんに健康に関する情報を発信していきます。次回の健康講座は9月に予定しています。決まりましたらチラシなどでお知らせいたします。



### 富田地域包括支援センターからのお知らせ

## いきいき暮らしヒントが学べる! 健康アップ教室



- 日時** 毎月 第3月曜日 (祝日の場合は第2月曜日) 午前10:00~11:30 **要申込**
- 場所** 富田公民館 2階/集会室3 (10月のみ大集会室)
- 持ち物** 筆記用具、飲み物、健幸パスポート(お持ちの方)

毎月いろいろな専門職から健康に関するお話を聞いたり、気軽に質問もできます。高槻市オリジナルの元気体操を行なって体も動かします。

2026年(令和8年)	
5月18日(月)	デイサービスのことを知る
6月15日(月)	養生堂「化粧品療法 いきいきセミナー」
7月13日(月)	理学療法士「痛みと上手に付き合う身体の使い方」
8月はお休みです	
9月14日(月)	栄養士「物価高の今こそ考えたい お金をかけずにしっかり栄養」
10月19日(月)	ノルディックウォーキング体験(別途申込・参加費要) 協賛: トップコーポレーション ゆとり

詳しくはお電話にてお問い合わせください。 TEL.072-694-2434

# 患者さんに暮らしの場に戻っていただくために 病院内外のたくさんの人をつなぐ



植田 光世 / 社会福祉士

特養での介護職、訪問ヘルパー、在宅でのケアマネジャーを経て当院の地域連携室に。



大西 由華 / 社会福祉士

事務職、障がい者施設勤務を経て当院の地域連携室に。



滝井 道子 / 社会福祉士

一般企業の事務職を経て当院の医事課に。3年前より地域連携室の事務として勤務しながら社会福祉士を取得。



白石 友香 / 社会福祉士

重度障がい者の生活介護、社会福祉法人健康会そらいろ保育園などでの保育士を経て、当院の地域連携室に。

## 連携室の役割という

「病棟の入退院の調整」がイメージされがちですが、もう少し具体的なお仕事をお聞かせください

滝井：急性期病院だけでなく、地域からも含めさまざまな依頼や相談の窓口です。特に入院の受け入れはスピードが大事なので、届いた情報を院内の関連部署へ送って、その返信を集約して、できるだけ早く先方にお返事しています。

白石：入院や転院のタイミングは、患者さんのこれまでの暮らしや今後への思いをお聴きできる大事なチャンスでもあるので、私たちが患者さんの「その人らしさ」を次の場へつなぐために、できるだけ丁寧にお聴きすることを意識しています。

## 患者さんの入院中にはどういったことを

白石：入院前のご家族との面談では、患者さんの今までの生活や趣味などもお聞きします。入院生活で活かせることがあるかもしれないので。

大西：入院当日も含めて患者さんやご家族と今後のことを話し合います。病気のことは医師、リハビリのことはセラピスト、お薬のことは薬剤師、食事のことは管理栄養士、生活全般については看護師、と多職種が患者さんの「現在地」を見定めて、退院後の暮らしについてそれぞれの視点で目標設定をして、その内容を関係者で共有するための「つなぎ役」が、私たちの大事な仕事です。



## ご自宅への退院の場合、 家屋調査にも同行されるとか

植田：リハビリスタッフや病棟看護師、担当ケアマネジャーさん、福祉用具の方にも同行してもらって、患者さんの退院後の暮らしを想定しながら、多職種で現地で相談するのは、とても効果的です。お家の中だけでなく、周辺の環境、たとえばかかりつけ医や近所のスーパー、バス停までの道などを知ること、退院に向けて準備すべきことがよりリアルに見えてきます。

大西：退院前カンファレンスも私たちが調整しています。そこで、病院スタッフだけでなく、退院後に関わっていただく在宅医や在宅サービスの方、施設入所であれば施設の担当者の方にも来ていただいて、みんなで話し合います。この日程調整が意外と難しいんですよ。

白石：退院後もご家族やご本人から相談の電話も時々あるので、退院したから終わりではなく、つながっている気がします。

## 退院先はご自宅以外にもいろいろありますね

大西：患者さんご自身やご家族の状況などによって、ご自宅以外のいろんな場所が「暮らしの場」になってきています。その方の状況に合ったご提案ができたかと思っています。地域の中にもどのような「帰場所」があるのかを知っておくこと、それを具体的に説明できることが大事だと考えています。

植田：これは看護部とも協働しての取り組みですが、地域にある介護老人保健施設（老健）に見学に行かせてもらったり、逆に当院へ施設スタッフに見学に来ていただくことを続けています。普段は電話や書面でのやりとりが多いので、「顔が見える」関係になっておくことが大事だということを実感します。

滝井：近くに新しい施設ができれば、見学して費用面なども把握するようにしています。

## 〈退院後の連携先〉だけでなく、 〈入院前の場〉とのつながりも大事にされている

植田：はい。ご紹介を多くいただく急性期病院の連携室とは定期的にオンラインで顔を合わせるようにしています。同じ医療圏の中で急性期病院の入退院の状況を知ることは、「医療とくらしのつなぎ目」を担う私たちにとって欠かせません。転院をお受けした患者さん、逆に病状によって急性期病院へお送りした患者さんの状況を共有するのも、よりタイムリーなやりとりのために大切です。地域のクリニックの先生には定期的に訪問させていただいています。クリニックでは難しい嚥下評価や個別性のある食事指導のご依頼を受けることも多くて、定評をいただいています。



## これからもっとこんな地域連携を 進めていきたい、とイメージしていることは

植田：「顔が見える関係」をつくるうえで、うちの病院の規模は強みだと思っています。その強みを活かして、もっといろんな関係づくりを上げていけたらいいなと思っています。

大西：地域連携とは少し離れるかもしれませんが、患者さんが思い通りに動けなくなってご自分でトイレに行けなくなったりした時に、すぐネガティブなことをおっしゃる。その姿を見て、自分がその状況になったら同じような気持ちになるのかなと思ってしまいます。そうではなく、最期の瞬間まで楽しく生きていきたいな、そういう世の中になればいいな、と思います。そのためにはどう関わっていけばいいのかわからない、そんなことも考えながら仕事をしていきたいです。

植田：生活の中で困ったことがあった時に、「どこに相談したらわからないけど」と声をかけてもらえる私たちでありたいと思います。

滝井：そういったご相談があった時に、それにきちんと応えられる自分になりたいです。日々精進だと思ってます。

白石：私は、庸愛会と関連法人である健康会のそらいろ保育園で働いていたのですが、そこでも「地域連携」を大事にしていました。地域の子どもさんや親御さんと一緒に遊ぶ企画のなかで、子どもとどう遊んでいいかわからないといった不安やご相談を自然に出してもらって、保育士がゆっくりお聴きしていました。そうした機会につながって、何か助けになる、安心してもらえるのって、とてもいいなと思っていました。いろんな世代の地域のみなさんとのつながりをつくっていったらいいなと思います。

植田：富田町病院では地域の方に向けて健康講座や糖尿病教室を開いたり、「かなえかわら版」や「DM（ドンマイ）通信」を発行したりしていますが、そういうことをとおして地域の方とつながる、つながれる場をつくっていくことをもっと進めていけたらと思っています。

地域連携室は、患者さんが生活の場に戻るために、患者さんやご家族を医療・介護につなげる、そのためには院内の多職種のスタッフをつなげる、さらには院外の様々な職種のみなさんをつなげる、大切な「つなぎ役」です。次号では、地域とのつながりというところをさらにクローズアップしてご紹介します。